



# ふたはの桂

京都府大広報 **No.177** | 2016.3

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



京都府立農林学校



京都府立女子専門学校



西京大学



**特集** 京都府立大学開学 120 周年記念イベントを開催 —— 2

## CONTENTS

地域連携・地域貢献 — 4	公開講座・生涯学習 — 5	和食文化研究 — 6	
広報委員会からのお知らせ — 6	国際交流 — 7	イベント情報 — 7	
各学部・研究科の取り組み	文学部 — 8	公共政策学部 — 8	受賞情報 — 8
生命環境科学研究科 — 9	退職教員からのメッセージ — 11	ニューフェイス — 12	

## 特集

# 京都府立大学開学 120 周年記念イベント開催報告

京都府立大学 120 周年記念事業実行委員会  
会長 浅井 学

昨年は本学が開学してから 120 周年、人間で言うところの「大還暦」を迎えました。それを記念して、昨年 10 月より一連の記念イベントを行いました。府大広報『ふたはの桂』の誌面をお借りして、簡単ですがここにその様子をご報告したいと思います。

## 府大大還暦記念作品展

一連のイベントの最初のものとなったのが、この「府大大還暦記念作品展」です。メイン行事の記念式典・記念講演会は 11 月 14 日の大学祭「流木祭」に合わせて行われましたが、それに先立つイベントとして 10 月 21 日から 23 日にかけて開催されました。これは府大の学生・院生・教職員から、絵画、写真、イラスト、立体模型など、日ごろの創作活動で生み出された作品を募集し、それを展示して学内の祝祭的な気分を盛り上げることを意図した企画でした。全部で約 40 点の作品の応募があり、会場となった 1 号館 1 階のピロティに展示されました。同時に作品展を観覧した方の投票によるコンテストも行われ、邦楽部が出品した作品

「邦楽部」が優勝し、賞品の図書券 1 万円分を獲得しました。この作品展は、本学も加入している北山文化環境ゾーン交流連携会議



(北山ぱーとなーず) 主催のスタンプラリーに参加しましたので、一般府民の皆様にもお立ち寄りいただき、府大生の日頃の創作活動の一端を見ていただくことができました。

## 120 周年記念式典



メイン行事のひとつである記念式典は、11 月 14 日午前 10 時 40 分から稲盛記念会館 1 階 104 号講義室にて厳かに執り行われました。当日はあいにくの雨模様でしたが、京都府、京都府議会、包括協定締結自治体、府内他大学、北山ぱーとなーず、同窓会・後援会・校友会、京都府立大学法人からのご来賓、また本学名誉教授、卒業生、在学生、教職員、あわせて 120 余名のご臨席を賜りました。式は築山学長の式辞に始まり、荒巻法人理事長の挨拶、ご来賓からの祝辞と続き、120 周年記念ロゴ最優秀賞受賞者の表彰も行われました(受賞は 2009 年本学卒業の小玉一徳氏)。また、本年度から新たに創設された「加藤章夫育英資金」の設立発表と、亡くなられた加藤章夫先生のご遺族への感謝状の贈呈が行われました。

## 120 周年記念講演会

記念講演会は、14 日午後 3 時から合同講義棟第 3 講義室をメイン会場とし、映像の同時中継により同第 7 講義室をサテライト会場にして行われました。雨天にもかかわらず定員 300 名の第 3 講義室は満員となり、第 7 講義室のほうにも 50 余名の方がお出で下さいました。

講演に先立ち、サプライズ登場で山田啓二京都府知事が挨拶に立たれました。大切な公用があり午前中の式典にはご出席いただけなかったのですが、府大の 120 周年を祝すために急遽駆けつけて下さったものです。事前の告知が全くなかったため、司会から紹介があると満員の会場からどよめきが沸き起こりました。

講演会の講師は、本学卒業生でソフトバンク株式会社 代表取締役社長 兼 CEO である宮内 謙氏。『進化が未来を切り拓く』という演題で、府大在学時代のご自身の様子から、今後会社として注力していく予定の分野、また、テクノロジー発展の未来予想図に到るまで、「進化」という言葉をキーワードに、広範にわたるトピックを取り上げお話し下さいました。プレゼンテーションのスライドは、静止画だけではなく要所々々で動画も用い、大変見ごたえ聞きごたえのあるご講演でした。また、講演の最初と最後には、ソフトバンクロボティクスが開発し昨夏からソフトバンクが販売している今話題の感情認識パーソナルロボット Pepper が登場し、愛くるしい仕草とおしゃべりで会場を盛り上げてくれました。



## 記念レセプション

記念講演会の後、稲盛記念会館1階のレストラン「たまご」に会場を移して、120周年記念事業実行委員会と同窓会共催の記念レセプションが行われました。ソフトバンク宮内社長にも引き続きご参加いただき、学生たちとも交流していただきました。また、Pepper

も二人(?) 会場に登場し、レセプション参加者と会話をしたり記念撮影に応じたりと、最後まで大活躍してくれました。記念レセプションには想定をはるかに上回る数の方が参加され、用意していた料理があっという間になくなってしまふほどの盛況ぶりでした。

## 「府大学術マルシェ」と「思い出写真館・上映会」

11月14日には記念式典・記念講演会の他にも、120周年関連行事として、「府大学術マルシェ」と「思い出写真館・上映会」を行いました。「府大学術マルシェ」は府大の教育・研究の成果物を紹介・販売する企画です。流木祭実行委員会の協力とご好意により模擬店エリアのもっとも正門に近い「一等地」に場所を確保していただき、精華キャンパスの附属農場で収穫された野菜・果物や、カツラウリのケーキとスムージーを販売し、ダチョウ抗体マスクを試供品として配布、日本酒「なからぎ」の紹介を行いました。「思い出写真館・上映会」は、120年にわたる府大の歴史を映像と写真で振り返るといふ企画で、上映会は稲盛記念会館106号

教室で、写真展示は同じく稲盛記念会館の玄関ホールで行いました。写真のほうは、その後1ヶ月ほどそのまま展示を続けましたが、多くの学生の皆さんが授業の前後に前を通りかかり足を留め写真を見て府大の歴史に思いを馳せていたようです。



## 120周年記念植樹



本年2月22日には、大枝演習林において、生命環境学部附属演習林、生命環境学部森林科学科、120周年記念事業実行委員会共催の120周年記念植樹が開催されました。

築山学長を含む総勢約60名が参加し、4つのグループに分かれて大枝演習林の中を散策した後、ヒノキやクリの植樹と標柱の除幕式を行いました。天気にも恵まれ、120周年記念事業の掉尾を飾るにふさわしい楽しくにぎやかな記念植樹となりました。

この日植えた木々の成長とともに、京都府立大学が150年、200年と時を刻んで、ますます成長・発展していくことを祈っています。

一連のイベントにおいては、その準備や実施にあたり、多くの教職員、在校生・卒業生、同窓会理事の皆様、そして、ソフトバンク株式会社の皆様より惜しみないご協力を賜りました。また、記念事業のために学内外の多くの皆様よりご寄付を賜りました。京都府立大学120周年実行委員会会長として、この場を借りて改めて御礼申し上げます。誠に有り難うございました。

## 地域連携・地域貢献

### 京丹後市と連携協力包括協定を締結

京丹後市との連携・協力の取組を今後一層推進するため、平成28年3月16日に連携協力に係る包括協定を締結しました。

平成16年4月、旧峰山町、大宮町、網野町、丹後町、弥栄町、久美浜長の合併により誕生した京丹後市は、“鳴き砂”で有名な「琴引浜」をはじめとする貴重な地形・地質遺産により「世界ジオパークネットワーク」への加盟を認定された海岸線を有し、「丹後ちりめん」や機械金属工業のほか、冬の味覚カニ・カキを活かした観光業が盛んです。

また、同市では、大学生等が地域住民らとともに地域の課題解決や地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化や人材育成に資する、いわゆる「域学連携」を継続的・戦略的かつ包括的・体系的に進めるため、平成26年に「京丹後市夢まち創り大学」を設置し、全国の多様な大学と連携して、発展的な地域課題の解決と地域振興に取り組んでいます。

京丹後市と本学は、これまで、本学の地域貢献型特別研究（ACTR）を活用した、地域史資料の調査・整理・保存や里山整備に関する共同研究の実施、大丹後展や地域文化セミナーの共催など、様々な連携・協働を行ってきました。

本学は、府民の大学として、地域貢献・地域振興を大学の理念の一つに据えて、教育・研究を行っており、この連携協力包括協定を締結し、また、「京丹後市夢まち創り大学」に参画することにより、幅広い分野で京丹後市の課題に対応し、府北部地域の更なる発展に貢献するとともに、本学学生の地域で学ぶ機会を充実させ、実践的教育による人材育成を推進していきたいと考えています。

包括協定では、今後、次の事項について連携協力をさらに進めていくこととしています。

- (1) 教育研究を通じた地域の振興に関する事項
- (2) 人材育成に関する事項
- (3) 文化・教育の振興に関する事項

- (4) 健康・福祉の増進に関する事項
- (5) 環境保全に関する事項
- (6) 産業振興、まちづくりの推進に関する事項 等

連携協力包括協定の締結にあたり、中山泰 京丹後市長からメッセージをいただきましたので、御紹介します。

#### 連携協力包括協定の締結にあたって

京丹後市長 中山 泰  
(敬称略)

この度、京都府立大学と京丹後市は、連携協力包括協定を締結する運びとなり、大変うれしく思っております。

貴学と本市は、既に多くの連携協力の実績を上げてきました。例えば、京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）では、本市における環境保全や再生可能エネルギーの利用、地域の文化の保存及び地域活性化等の研究活動に取り組まれています。

本市では、大学と地域が連携し、地域課題の解決や地域活性化を図るためのプラットフォームとして「京丹後市夢まち創り大学」を設立しました。大学生を送迎するためのバスの運行、無料で宿泊できるシェアハウスの整備、地域と大学をつなぐコーディネーターの配置等を行い、現在、全国9大学の学生が本市で活動しています。

今回の締結をきっかけに、貴学にも「夢まち創り大学」に大学全体として御参画いただくことになりました。「夢まち創り大学」の活動などを通じて、貴学と本市の協力がますます活発となり、貴学の教育研究活動と本市の地方創生事業が連携し相互によりよい成果を生み出していけるものと期待しております。



### 京丹後市との連携による「日本のふるさと 大丹後展」開催

平成27年12月5日から平成28年1月17日まで、京都府京都文化博物館において、本学、京都府、京都文化博物館、京丹後市、京都新聞の主催により、「日本のふるさと 大丹後展」が開催されました。

文学部歴史学科では、平成25年から京丹後市と連携し、日本史学・文化遺産学コースの教員が中心となって「日本のふるさと 大丹後展」の企画・調査・図録作成などに携わってきました。

文学研究科の大学院生も、会期中の3日間、交流・伝説・霊地・生産の4テーマで構成された展示品のなかから、大学院生な



展示会のテープカットの様子  
(左から2人目が薬山学長)

らではの視点で展示品を取り上げて展示解説を行い、丹後に伝わるさまざまな資料を紹介しました。

また、会期中の12月12日には、京丹後市峰山総合福祉センターにおいて、関連シンポジウム「丹後展の見どころを探る」が開催され、本学文学部歴史学科の菱田哲郎教授、横内裕人准教授、藤本仁文准教授らが講演され、後半のパネルディスカッションでは、小林啓治教授のコーディネートにより、活発なディスカッションが行われました。



文学研究科大学院生による展示解説

## ■地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)採択を受けた本学の取り組み

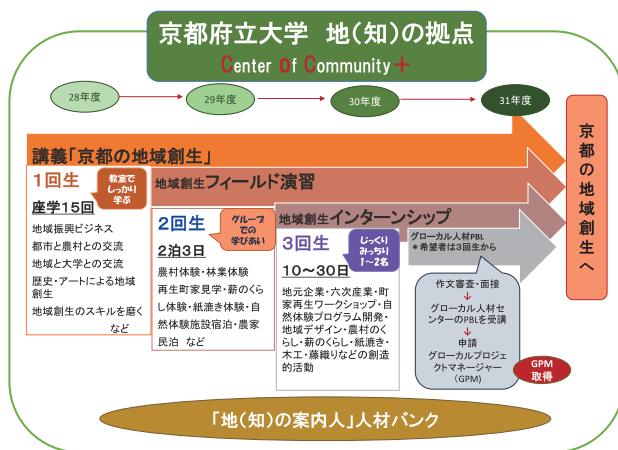
この度、文部科学省が実施する平成27年度「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」に、本学が参画する「北京都を中心とする国公私・高専連携による京都創生人材育成事業」(代表校:京都工芸繊維大学、参加機関:京都府立大学、京都学園大学、舞鶴工業高等専門学校等)が採択されました。

本事業は、平成27年度から平成31年度までの5年間、北京都(府北部・中部地域)を中心として、府内の国公立大学・高専、地方自治体、企業等との連携により、地域創生人材を輩出し、若者を地元に着させることで、府全体の地域活性化を図る取組です。本学は創立120年の豊かな蓄積のもと、内外の文学や文化・歴史、生命とその環境、福祉社会と公共政策など、人間の豊かな生の実現に関わる諸科学・専門分野で、その先端を切り拓く研究と教育に力を注いできました。教養教育においては、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との共同による多様な科目とアクティブな学びとあわせて、京都の歴史・文化、自然、産業などを対象とした「京都学」、京都府を主なフィールドとする「環境共生フィールド演習」などの地域志向を織り込んだカリキュラムを展開しています。

また、府内大学と連携した地域公共人材、グローバル人材の育成も進めています。公立の大学として、京都府はじめ自治体・企業等の支援、協力のもと地域に貢献する大学づくりをめざし研究と教育を重ねてきました。

これらの活動により京都府内の各地域で活躍される様々な分

野の方々とのつながりができ、貴重な学びの場となっています。この地域の人材ネットワークを「地域創生COC+人材バンク」として大学教育のしくみに取り入れ、学生たちが自分の将来の進路や生き方を考える上での有益な教育の場として「地(知)の拠点」の構築をめざし、「京都の地域創生」「地域創生フィールド演習」など新たな教育プログラムの開発を進めていきます。



## 公開講座・生涯学習

### ■国際京都学シンポジウムを開催

#### ユネスコ世界記憶遺産に向けて

京都府、舞鶴市、本学、京都新聞主催により、世界記憶遺産登録資料に焦点を当てた3回シリーズの国際京都学シンポジウム「ユネスコ世界記憶遺産に向けて」を開催しました。

- ◇第1回「時の詩—京都の記憶を世界へ—」  
9月19日(京都劇場)、参加者595名
- ◇第2回「東寺百合文書の現在と未来」  
10月12日(本学稲盛記念会館)、参加者330名
- ◇第3回「港を行き交う記憶—舞鶴引き揚げ資料から—」  
11月21日(龍谷大学 響都ホール)、参加者220名



本学文学部歴史学科の横内裕人准教授が講師の一人として登壇した第2回では、東寺百合文書に代表される京都の史料の世界的価値、東寺百合文書のアーカイブ化の取組、東寺百合文書WEBの実演や高精細画像を利用した中世史研究の更なる展開の可能性について提起され、盛会のうちに終了しました。

#### ジャポニズムの京都—世界を魅了した明治の工芸

文学部主催による国際京都学シンポジウム「ジャポニズムの京都—世界を魅了した明治の工芸」を、2015年12月19日、本学稲盛記念会館において開催しました。(共催:京都府立総合資料館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、京都府立大学地域連携センター)

明治維新・東京遷都のため衰退の危機に直面した京都の工芸界が、19世紀後半に盛んに開かれた万国博覧会をきっかけにジャポニズムの流行をみた欧米への輸出に活路を見出す。



本シンポジウムは、そんな時代の京都の工芸に光をあて、様々な角度から考察したものです。

当日は216名のご来聴をいただき、大変盛況でした。(写真:清水三年坂美術館の村田館長による基調講演の様子)

## 和食文化研究

### ■ 京都和食文化研究センター 新センター長就任

新センター長 就任メッセージ

#### 日本初の和食文化の高等教育機関設置を目指して

京都和食文化研究センター長 宗田好史

平成 27 年ミラノで開催された「食の万博」が日本国内でも話題を集めました。京都からも日本料理界の重鎮の皆さまが参加され、多くの観客を魅了しました。また、全国各地の代表、日本の食品業界の多くの皆さまが参加し、世界的に関心の高い日本料理と和食の文化を紹介しました。



このミラノ万博が「地球に食料を、生命にエネルギーを」をテーマとしたことから分かるように、平成 8 年世界食糧サミットと「ローマ宣言」、平成 21 年世界食糧安全保障サミットなど、FAO(世界食糧農業機関)を中心に国連が進める人類共通の食料を巡る大きな課題があります。一方、平成 25 年に UNESCO 無形文化遺産に「和食、日本人の伝統的な食文化」が登録され、フランス人の美食術、地中海の食事法、メキシコの伝統料理、トルコのケシュケキ料理などとともに食文化が注目されています。現在も、東南アジア諸国がニョニヤ料理の登録を進めるなど、世界的に食文化が再評価されています。この多様な食文化を探究するグローバルな動きの背景には、食料を巡る人類の課題に応えようという期待があります。

そのため、西欧諸国を中心に人類の所産である食文化の研究が

急速に進んでいます。わが国でも世界無形遺産への登録を契機に、この機運が高まり、和食文化を正しく理解し、日本料理の伝統を継承・発展し、担い手となる人材を育成し、世界に発信する取組みが始まりました。

京都府立大学では、平成 31 年度までに和食文化の高等教育機関を設置するため、平成 26 年に京都和食文化研究センターを開設しました。センターでは現在、食科学の研究に加え、人類学、歴史学、歴史地理学などの分野から食文化の起源を探り、大陸との交流と日本列島各地で独自に育まれた食材や料理術の軌跡をたどる研究を始めています。

1200 余年の古都・京都は、有職料理、精進料理、懐石料理など日本料理の中核が最初に受容され、発展し続けた地です。そして、それらが融合した現代の京料理は優れた料理界の人々により世界を魅了しています。その一方で、暮らしの中で営まれたおぼんざいも息づいています。さらに、茶道、華道など現在も伝統文化を担う多くの方々は、それぞれのお立場から幅広く和食文化の歴史を伝え、和食の継承・発展に努め、その可能性を語っておられます。京野菜など優れた食材の数々を生む農業とその流通を支える市場の皆さま、日本酒、味噌、漬物など伝統に裏付けられ現代も発展し続ける食品業の皆さまが一丸となって、和食文化を極めるための取組みを続けています。

京都和食文化研究センターでは、こうした京都の皆さまのご支援をいただき、京都府民の皆さまの期待に応える和食文化の継承・発展を担う役割を果たします。同時に、和食文化を極め、世界に発信することで、21 世紀の人類の課題に応える道を探ります。

### ■ 和食文化の高等教育機関設置に関する包括連携協定を締結

平成 27 年 11 月 11 日、大阪ガス株式会社、カゴメ株式会社、キッコーマン株式会社、特定非営利活動法人日本料理アカデミーと和食文化の高等教育機関設置に関する包括連携協定を締結しました。

本学で取り組む和食文化の学部(学科)の設置に向けた事業に対し、食関連企業・団体から支援を受けることにより、和食文化の高等教育機関の設置及び和食文化に関する教育・研究の一層の推進を図ります。

## 広報委員会からのお知らせ

### ホームページをリニューアルしました！

本年 3 月、本学公式ホームページを更新しました。学部・学科情報、入試情報、府大ニュース、イベント情報など、皆さまが必要とする情報に、素早くたどりつけるよう、メニューを改善しました。また、本学のイメージが視覚的に伝わるよう、写真を多く掲載しました。

是非一度、ご覧下さい。 <http://www.kpu.ac.jp/>



## 国際交流

## ■ 文学部と漢城大学校人文大学歴史文化学部が学術交流協定を締結

2015年11月5日、本学文学部は、大韓民国の漢城大学校人文大学歴史文化学部と学術交流に関する協定を締結しました。本学で行われた調印式には、漢城大学校から、鄭好燮歴史文化学部長、歴史文化学部の朴駿徹教授、李在碩教授が出席されました。築山学長の挨拶、渡邊文学部長と鄭歴史文化学部長による協定書調印の後、和やかに歓談が行われました。



鄭好燮歴史文化学部長(左)と渡邊文学部長

漢城大学校は、ソウル特別市にある私立大学で、1.開かれた思考と国際競争を備えた世界人材を育成すること、2.共同体意識と文化的要素を備えた社会人を育成すること、3.多様性と創意性を持った専門人を育成することを理念と

しています。

歴史文化学部は、韓国と東洋・西洋の歴史と文化を研究、教育することにより、21世紀の世界化時代が要求する未来志向的な人材の養成を目指しています。また、大学院では、1.韓国人としての自主性を確立する歴史学研究者の育成、2.世界的変化に能動的に対処する歴史的知識を備えた専門知識人の養成、3.史料分析研究成果分析能力をふまえて、韓国及び世界史の流れを把握し、主導的な専門人の養成を教育目標としています。

これまで文学部の井上直樹准教授が中心となり、学会・研究活動を通じて学術交流を行ってまいりましたが、2015年1月、協定を締結して学部規模で交流を進めることに合意を得、国際交流協定を締結することになりました。

今後は研究者の相互訪問や、研究会の開催、大学院生の学術交流などを通じ、本学全体の研究・教育に効果が及ぶことが期待されます。

## ■ 生命環境科学研究科とハノイ医科大学予防医学・公衆衛生学研究所が学術交流協定を締結

2015年11月19日、本学生命環境科学研究科は、ベトナム社会主義共和国のハノイ医科大学(HMU) 予防医学・公衆衛生学研究所と学術交流に関する協定を締結しました。

ハノイ医科大学は、1902年に開学したベトナム最古の国立の医科大学であり、医学部、歯科学研究所、予防医学・公衆衛生学研究所等の6学部を有します。予防医学・公衆衛生学研究所は2010年に公衆衛生学部の拡充により新設され、10専攻を有し学生数は約1,000名です。

これまで、生命環境科学研究科の教員が栄養士養成コースの新設への助言と集中講義を通じて学術交流を行ってまいりましたが、学部間での交流を継続的に進めていくことで基本的に合意し、学術交流協定を締結することになりました。

ハノイ医科大学で行われた調印式には本学から中村志教授が出席され、"Expectation of health benefits in Vietnamese food based on Washoku (Japanese cuisine) study focusing on

Kyo-yasai (heirloom vegetables in Kyoto)" [和訳：和食研究(特に京野菜の機能性)を基盤としたベトナムの食材への期待]をテーマに締結記念講演が行われました。

HMU教員による英語からベトナム語への通訳(学生用)も交えて行われた同講演会で、中村教授は、和食材のうち、主に普及種野菜よりも風味の高い京野菜の食品機能性のデータをもとに、特有の高い風味をもつベトナムの香草などにも食品機能性が期待されることについて、解説されました。

今後は、ベトナム伝統食材の食品機能性の探索と医療応用について、共同研究が進められる予定です。



中村教授による締結記念講演会の様子

## イベント情報

## 平成28年度桜楓講座(春の部)のご案内

最近のトピックを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野について分かりやすく解説します。

Aコース 6月4日(土) 10:00～12:00

「20世紀最大の作家ジェイムズ・ジョイスの小説」

講師：文学部教授 浅井 学

Bコース 6月18日(土) 10:00～12:00

「スポーツサイエンスの活用術」

講師：生命環境科学研究科助教 青井 渉

場 所：両コースともに、京都府立大学稲盛記念会館102講義室  
受講料：無料(要申込) ※5月から受講者を募集する予定です。

## 各学部・研究科の取り組み

## 文学部

## ことばの歴史を文献からたどる

日本・中国文学科 鳴海 伸一 講師

「日本語を研究している」と言うと、〈乱れた〉日本語をきびしくチェックしている人だとおもわれたり、どういう言葉づかいが〈正しい〉のかをよく知っている人だとおもわれたりすることがありますが、日本語の研究とは、そういうことではありません。

たとえば、「一生（しょう）懸命」という語があります。中国文献にはみられない漢字語ですので、和製漢語です。これが「一所（しょ）懸命」から変化したものであることは一般によく知られているでしょう。しかし、「一生懸命」も、実は江戸時代からみられますので、それほどあたらしいものでもありません。また、現在の「一生懸命がんばります」のように、動詞を修飾する副詞として使用されるのは、「一生懸命」が現れた後のことであり、「一所懸命」のみの時代にはみられません。たとえばこういったことが、古い文献（古典文学や、古記録・

古文書、古辞書など）をしらべることで、わかってきます。そして大事なことは、この二語だけの問題ではないということです。もともと「一所懸命」は、武士が所領にすべてをかけることをあらわした語ですから、それがどのように現在のものになったのかというのは、《意味》の問題です。副詞としての用法を分析するのは《文法》の問題です。そして「所」が「生」に変わったことから、そうした意味・用法の変化と《(漢字)表記》が関連をもっていることがわかります。また、「ショ」が「ショー」に変わったという見かたをすれば、《音韻》、つまり発音の問題でもあります。

では、「所（ショ）」とすべきか「生（ショー）」とすべきかというのは、どういう問題でしょうか。〈正しさ〉そのものを問うことはできませんが、このばあい、現代の使用の実態から、言語使用者の《規範意識》をさぐることができるでしょう。

日本語における漢語の変容の研究  
副詞化を中心として  
(ひつじ研究叢書〈言語編〉第125巻)

## 公共政策学部

## 公務員という仕事

公共政策学科 玉井 亮子 准教授

公務員のお仕事について皆さんはどのような印象をお持ちでしょうか。「地元の公務員になって地域に貢献したい」、「中央省庁で働いて日本の福祉社会構築に寄与したい」など、将来、就きたい職業の一つとして公務員を志望される学生さんもおられることと思います。公務員が携わる行政の活動というのは私たちの生活と深く関係しています。また地方公務員であれ国家公務員であれ、公務員は議員たちと共に仕事をしています。民間企業との情報交換も彼らにとって重要な仕事の一つです。政治や社会の流れと密接に結びつくところに行政の活動はあるのです。

そのような行政の活動をフランスの地方公務員制度から観察しています。最近は地方公務員の研修システムや、自治体レベルでの公務員の人事異動の様相を取り上げて研究を行っています。長い歴史のなかから政治行政システムを自ら構築してきたフランスには、その国特有の、また多種多様な制度や理論の蓄

積があります。フランスにおける権力のあり方とかその正当性の獲得や維持の実態や技法を、公務員人事システムから明らかにしたいと考えています。もちろんフランスと日本には様々な点で大きな違いがあります。事例によっては民主主義的価値の捉えかたにも違いがあったりします。しかしフランスへの検討が日本で起こっている問題の解決や政策立案のヒントにつながるかもしれない、といった淡い期待を抱きつつ、研究に取り組んでいます。

自身の研究は現代の事例を対象にしていることもあり、年に一度は現地に行き、政策担当者や研究者にインタビューしたり、資料を集めることにしています（写真はフランス・ボルドーの市庁舎）。日本であれフランスであれ、その政治行政システムのなかで合理性や民主性がどのように位置づけられているのかといった疑問を常に念頭におきつつ、今後も研究と向き合っていきたいと考えています。



## 受賞情報①

## 文学部／文学研究科

歴史学科 菱田 哲郎 教授

平成27年度「科研費」審査委員表彰を受賞

科研費の審査において、有意義な審査意見を付し公正・公平な審査に大きく貢献されたことにより、独立行政法人日本学術振興会の平成27年度「科研費」審査委員表彰を受賞されました。

学術研究員（非常勤講師）西尾 和子さん 「日本中国学会賞」受賞

論文「南宋期における『太平廣記』受容の拡大要因について」（『日本中国学会報』第66集）により、「日本中国学会賞」を受賞されました。

研修員（非常勤講師）井口 千雪さん 「東方学会賞」受賞

論文『三国志演義』三系統の版本の継承関係—劉龍田本をてがかりに—（『東方学』127輯）およびこれと関連する研究活動により、「東方学会賞」を受賞されました。



## 生命環境科学研究科

### 木造住宅の耐震性向上への課題

環境科学専攻 木質構造・材料生産研究室 田淵 敦士 准教授

現在、東日本大震災を超える大きな地震が想定されており、その対策が急務となっています。特に住宅の耐震化は喫緊の課題として位置づけられており、国は10年後に95%の耐震化率を目指しています。ところが、京都府の木造住宅に関しては現状で80%あまりの耐震化率に止まっています。また、京都には伝統的な木造住宅も数多く残っており、これらは耐震化が遅れている部分でもあります。そのため、伝統的な木造住宅の耐震化を進めることが全体の耐震化率を向上させる鍵になります。そこで本研究室では、おもに次の4点を課題として研究に取り組んでいます。

#### 1) 建物の揺れ方を調べて耐震診断に役立てる技術の開発

建物の性能を調べるのは実測するのが理想的です。しかし、高価な装置が必要になるなどハードルが高いのが実情です。そこで、簡易な方法で精度良く診断する仕組みの構築を目指して研究しています。

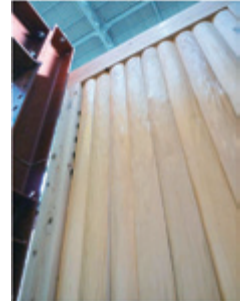
2) 伝統木構造が地震時にどのような揺れ方になるか  
振動実験や材料実験などを通じて明らかになったことを、実際の建物に適用することで、耐震設計に役立てます。

3) 北山スギなどの地元の木材を用いて耐震性能を向上させる方法の開発

本研究室で開発した北山スギを用いた耐力壁は、その性能を国土交通大臣認定されています。伝統木造住宅の持つしなやかな変形性能を損なわない形での耐震補強も可能となります。

4) 伝統木造技術の科学的評価方法の開発

伝統木造建築の文化を後世に伝えていくためには、技術を客観的な方法で評価することが必要です。特に耐震性を要求される場合には、現代の評価方法との整合性をとらなければなりません。大工技術や左官技術について、特に強度面からの評価方法を研究しています。



北山スギ丸太を用いた耐力壁

## 生命環境科学研究科

### 樹を知り、木を活かす

#### —森林資源の循環利用を推進するために—

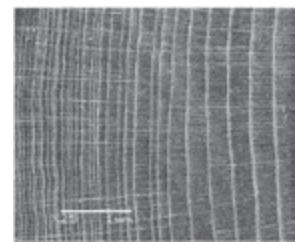
環境科学専攻 生物材料物性学研究室 神代 圭輔 助教

日本は国土面積の約3分の2が森林で覆われた世界有数の森林国です。また、日本の森林面積の約4割は人が植えて育ててきた人工林であり、「植える→育てる→収穫する→適材適所で使う→植える」という森林資源の循環利用を推進することが必要です。しかしながら、日本の木材自給率は28.6%（平成25年）と、国産材の利用という点において近年増加傾向にはあるものの低迷が続いているのが現状です。森林資源の循環利用が進まないと、適切な森林整備が確保されず、将来にわたる木材利用や森林の多面的機能（国土の保全、水源の涵養、地球温暖化の防止など）の持続的な発揮が困難になることにつながるため、適材適所で木材を使うことが重要になります。

そもそも木材は材料として存在していたわけではなく、樹木として数十年～数百年の間存在していたものを、我々が木材という材料として利用させてもらっているのです。ついつい忘れがちになりますが、木材や竹材というのはまさに“生物材料”

なのです。「樹を知り、木を活かす」という本稿の題目は、生物材料物性学研究室の研究テーマでもあります。当研究室では、本来は樹木として存在していたということを意識しつつ、適材適所で木材を利用するための木材の物性や加工技術に関する基礎的な研究、新規木質系材料の開発、地域材の利用や木材流通に関する研究などを行っています。

私の主たる研究テーマは「非平衡状態における木材の物性」です。樹木として存在していた状態が木材にとっての安定状態であると考え、木質材料の製造・加工・使用時には、温度・含水率が変化することにより、木材は常に非平衡状態であると言っても過言ではありません。したがって、現在の研究テーマを推進することは木材を活かすためにも極めて重要であるといえます。今後はさらに、木材物性という視点からだけでなく森林科学という視点からも、樹木を知り木材を活かすことができると考えています。



大野演習林産ヒノキ（樹齢約100年）  
木口面のSEM写真

## 公共政策学部

公共政策学科 下村ゼミ、窪田・松岡ゼミ

京都から発信する政策研究交流大会「京都市長賞」「優秀賞」受賞

第11回京都から発信する政策研究大会（主催：（公財）大学コンソーシアム京都）において、下村ゼミA（2回生の北原達也さん、古賀徹真さん、白木佳穂さん、塚本麻衣さん、檜垣悠介さん、本川史佳さん、山本瑛菜さん）が「勝竜寺城公園『SHIROKOI』プロジェクト～お玉ちゃんおみくじ」の発表により「京都市長賞」を、窪田・松岡ゼミ ユース・コミュニティ班（2回生の稲波繰実さん、宇土絵里さん、加藤文香さん、竹野瑠莉さん、西村

芳奈子さん、早藤佑平さん）が「非行防止事業における協働の実態と問題点—京都府ユース・コミュニティづくり応援事業の事例から—」の発表により「優秀賞」を受賞しました。



左：下村ゼミ  
右：窪田・松岡ゼミ

■ 受賞情報② ■

生命環境科学研究科

応用生命科学専攻

博士後期課程3回生 稲葉 理美さん (生命物理化学研究室)  
**熱測定討論会「鳩山賞 (ポスター賞)」受賞**

第51回熱測定討論会において、「蛋白質リピート間リンカー領域が及ぼす構造安定性への影響と熱力学的特性の解明」の発表により、「鳩山賞 (ポスター賞)」を受賞しました。



博士前期課程2回生 水谷 将馬さん (機能分子合成化学研究室)  
**農薬デザイン研究会「優秀発表賞」受賞**

第30回農薬デザイン研究会において、「Darzens 反応を利用したラクタム天然物群の全合成」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。

博士前期課程2回生 加茂 翔伍さん (機能分子合成化学研究室)  
 // 森島 諒太さん ( // )  
**4大学連携研究フォーラム「最優秀賞」「優秀賞」受賞**

第5回4大学連携研究フォーラムにおいて、加茂翔伍さんが「ナフトキノ二量体天然物 Juglorescein および関連天然物の全合成」の発表により「最優秀賞」、森島諒太さんが「フェノールフタレイン類縁体を骨格とする機能性分子の開発」の発表により「優秀賞」を受賞しました。

博士前期課程1回生 太田 芳裕さん (機能分子合成化学研究室)  
**有機合成若手セミナー「優秀研究発表賞ポスターセッション」受賞**

第35回有機合成若手セミナーにおいて、「キラルオリゴナフタレン類を用いた動的超分子の濃度依存的な高次構造体の形成」の発表により、「優秀研究発表賞 (ポスターセッション)」を受賞しました。



機能分子合成化学研究室の受賞者のみなさんと指導教員 (左から榎教授、森島さん、太田さん、水谷さん、加茂さん、山上さん (学部生: 学部欄記載)、倉持准教授)

博士前期課程1回生 村田 大知さん (生体物質化学研究室)  
**BMLS student symposium「ポスター賞」受賞**

BMLS (Buchmann Institute for Molecular Life Sciences: 独国) の2nd BMLS student symposiumにおいて、「Structural study of autophagy adapter proteins (オートファジーアダプタータンパク質の構造学的研究)」の発表により、「ポスター賞」を受賞しました。



博士前期課程1回生 小林 正幸さん (応用昆虫学研究室)  
**日本昆虫学会近畿支部「若手発表賞」受賞**

2015年度日本昆虫学会近畿支部大会において、「植食性昆虫の寄主適応を例とした複合形質の遺伝基盤: クルマシホソガの実験系を用いて」の発表により、「若手発表賞」を受賞しました。

博士後期課程2回生 深田 史美さん (植物病理学研究室)  
**糸状菌分子生物学コンファレンス  
 「学生優秀ポスター発表賞」受賞**

第15回糸状菌分子生物学コンファレンスにおいて、「ウリ類炭疽病菌の染色体タギング法を用いた細胞周期およびGTPaseCoTem1局在の解析」(深田史美・久保康之)の発表により、「学生優秀ポスター発表賞」を受賞しました。



博士後期課程1回生 畑澤 幸乃さん (分子栄養学研究室)  
**日本アミノ酸学会 学術大会「優秀ポスター賞」受賞**

日本アミノ酸学会第9回学術大会において、「運動時の骨格筋でのPGC1 $\alpha$ を介したアミノ酸代謝の役割」の発表により、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

環境科学専攻

博士後期課程3回生 三好 由華さん (生体材料物性学研究室)  
**「日本木材学会優秀女子学生賞」受賞**

「木材の横引張変形特性」の研究題目により、一般社団法人日本木材学会の「第2回日本木材学会優秀女子学生賞」を受賞しました。

博士後期課程2回生 嶋田 美咲さん (森林植生学研究室)  
**日本植生史学会「第1回優秀発表賞」受賞**

日本植生史学会第30回大会において行った「別府湾海底堆積物の花粉分析に基づく過去7000年間の植生変遷」の発表により、同学会の「第1回優秀発表賞」を受賞しました。

博士後期課程2回生 瀬古 祥子さん (ランドスケープ学研究室)  
**日本造園学会「関西支部賞」受賞**

平成27年度日本造園学会関西支部大会において、「京都市都市部における街路樹根上りと土壌条件との関係」の発表により、「日本造園学会関西支部賞」を受賞しました。

生命環境学部

生命分子化学科4回生 山上 紅里さん (機能分子合成化学研究室分属)  
**日本薬学会近畿支部総会・大会「優秀ポスター賞」受賞**

第65回日本薬学会近畿支部総会・大会において、「V字型キサンテン色素の合成と機能」の発表により、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

環境・情報科学科4回生 柴田 佳那美さん (材料設計学専攻)  
**クロマトグラフィー科学会議  
 「若手研究者最優秀ポスター賞」受賞**

第26回クロマトグラフィー科学会議において、「イオン交換基の“働き方”を制御する」の発表により、「若手研究者最優秀ポスター賞」を受賞しました。



環境デザイン学科4回生 太田 奨吾さん (建築意匠学研究室)  
**インテリアプラン・コンテスト  
 「最優秀賞」受賞**

「ひろがる土間庭」をテーマとするインテリアデザインの設計案により、第9回インテリアプラン・コンテストにおいて「最優秀賞」を受賞しました。



■退職教員からのメッセージ■

Like a Rolling Stone

文学部 欧米言語文化学科 金澤 哲

去年4月フィラデルフィアに行き、デラウェア河沿いの船着き場を訪れた。晴れてはいたが風は冷たく、かつてここに逃げ出してきたフランクリンが感じた希望と不安が胸にしみた。空を仰いだ瞬間、イヤフォンからドラムの一撃が身を貫いた。"How does it feel/ To be on your own/ With no direction home/ Like a complete unknown/ Like a rolling stone?" 転がる石への痛罵と祝福、そして

歓喜の歌だった。

後期はゼミでディランの詞を読んだ。最後に取り上げたのが "Roll on John"。"Imagine" を歌ったジョン・レノンを悼んだ曲。虐げられ、暴力に斃れていく人々の姿をコラージュ風に綴りながら、ディランは繰り返す。"Shine your light/ Move it on/ You burned so bright/ Roll on John." いたわりに満ちた声を聞くと、教室で涙が出た。

21年間、こんな風に過ごしてきました。「ライブ」をともにしてくれたみなさん、ありがとうございました。またどこかでお会いしましょう。

退職にあたってのメッセージ

文学部 歴史学科 上田 純一

1989年(平成元年)、文学部史学科に赴任しました。ご記憶の方も多いと思いますが、この年は、国内では四月に消費税(3%)が開始され、海外では十一月にベルリンの壁が崩壊するという、とても印象深い年でした。次男が誕生したのも同年です。以来、本日まで府大にはお世話になり続け、いつのまにか四半世紀を越えてしまいました。

私自身、本学の卒業生でもありますので、三月の定年は二度目の

卒業のような気がしています。果たして必要な卒業単位を揃えることができたのかどうかは、少しばかり不安ですが…。教員生活を振り返ってみると、本当に楽しい思い出ばかりです。暖かい同僚の先生方や優秀な学生達に囲まれて過ごした日々は、これからの私の人生において、何ものにも代えがたい心の支えになってくれると思います。

最後になりましたが、府立大学の今後一層のご発展を、心よりお祈りしています。



伝統ある研究室での28年間

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 宮崎 猛

52年続く研究室では卒業・修了生350人程から成る農経会が毎年開催され、世代を越えた交流を行っている。この伝統の中で本学在職中に、8人の博士、26人の修士、160人余の学士の学位取得・卒業生を送り出せた。農経会以外でも、結婚式や職場、学会での再会、不意の来学等、卒業生との出会いは楽しいものである。

研究分野では地味な農業・農村の現場に長く携わり、農地と家族の

制度やツーリズムのあり方を主に探究してきた。グリーン・ツーリズムの研究については、当初から現場の関心が高く、多くの行政関係の委員や講演、専門雑誌での掲載に携わり、多忙を極めた。これからの自由な時間では、家族や地域、自然との生活のあり方の基本型を提供してくれる農業・農村にこだわり、現役時は不十分な研究のままであった農地と家族の制度を深めたいと考えている。長い間お世話になり、有難うございました。



定年を迎えるにあたって

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 大谷 貴美子

まずは、健康にこの日を迎えることができたことを喜んでます。そして着任して19年半、充実した日々を過ごさせていただいたことに感謝したいと思います。着任当初は、カルチャーショックを受けたことも多々ありました。しかし、研究を進めるうえで、何よりも和気あいあいとした人間関係が重要であること、そして、それが府立大学の宝物であることを確信させていただきました。大学を取り巻く環境は、

益々厳しく、若い人たちは、厳しい雇用環境の中で、プライベートな生活に不安を抱えながら研究生活を送らざるを得ない時代です。今後、府立大学も社会の競争原理という大きな波に浸食されていくであろうことが予測されますが、公の大学こそ、競争原理にそぐわない学問分野を大切にしていってほしいと願っています。府立大学が、今後も働く人すべてが安心して個人の才能が開花できる環境であらんことを。



12年と3ヶ月

生命環境科学研究科 環境科学専攻 松村 和樹

長いか短いか。平成16年1月1日に私が民間の財団法人から27年ぶりに母校府大へ帰ってきてからの期間です。その頃は砂防学研究室では卒論・修論の最終段階の学生・院生が顔色を変えて頑張っている時でした。その後は研究室の学生・院生とは昼間も夜も付き合い、夜は、今はありませんが近くの「黒川」という飲み屋で彼らの将来など様々なヨタ話をよくしていました。その飲み会は誰とはなしに「黒川ゼミ」と呼ぶようになり、今となってはどのような話をしていたのか記憶の

彼方になっていますが、非常に楽しかった思い出だけは残っています。

平成20年には大学改革の一環として新たに「流域情報学研究室」ができ、そこに移りました。研究の守備範囲が広がり学生・院生たちと様々な現地調査に出かけることが多くなりました。泊まりもあり、そのときのノミネーションも有意義な思い出です。

私の人生のなかで大学の教員といった思いもかけない期間があったことを感謝して、最後に私の信条「性格・やる気・体力」で筆を置きます。



感謝

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 倉持 幸司

京都府立大学には2008年4月に着任しました。それから8年間、多くの方々にお世話になりました。特に生命環境科学研究科の先生方や学生さんのおかげで、たくさんのことを学ぶことができました。この8年間で、私自身、すくなく成長できたと思っております。私の成長の証は風貌にもあらわれています。着任当初はよく学生と間違われておりました。そのため、購買部の前では公務員ガイダンス

や自動車免許のチラシが私にも配られていました。しかし、今では見事なまでに「おっさん」へと成長したので、チラシが配られることはめったになくなりました。大学生活で私が恵まれていた点は、樺一典先生と機能分子合成化学研究室の学生さんと一緒に研究できたことです。化学の追究を目指して、充実した研究生生活を送らせていただきました。心から感謝しております。



ありがとうございました。

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 朴 恩榮

私はキンモクセイの香りを嗅ぐとキンモクセイの香りのする大学のキャンパスを指導教官と先生といっしょに歩いていた留学のため日本に来た時のことを思い出します。キンモクセイの甘い香りがあるときのあのキャンパスを、あのときの自分に引き戻してくれます。この甘い香りを嗅ぎながら京都で15年5ヶ月間生活し、特に京都府立大学の食保健学科での11年間は楽しい研究ができ、教員とし

ても研究者としても、充実した11年でした。この間、多くの職員と教員にお世話になり、優秀な学生に囲まれて、充実した大学生活を過ごすことができました。皆様とともに府大で教育と研究に打ち込んだ11年間は私にとって一生忘れられない宝物です。この経験を活かし、韓国の大学でも頑張っていき、日本と韓国の架け橋になりたいと思います。本当にありがとうございました。



長年の間、学生の教育や研究などの発展にご尽力をいただき、本当にありがとうございました。

ニューフェース

■平成27年10・11月着任の教員紹介■

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 教授 板井 章浩 (いたい あきひろ)

〈主な研究領域〉  
資源植物学 果樹園芸学



ナシ、カキなど、新品種開発に非常に年限を必要とする果樹においてDNAなどの分子マーカーを使って将来を予測し、新品種育成を効率的に進める方法の開発や、果樹や野菜の生理・生態を遺伝子レベルで解明し、栽培技術への応用方法の開発を目的として研究を行っています。今後は京都府の園芸作物のオリジナル新品種作りにチャレンジしていきたいと思っております。

生命環境科学研究科 応用生命科学専攻 准教授 大坪 憲弘 (おおつぼ のりひろ)

〈主な研究領域〉  
分子生物学、花き等の分子育種



植物の発生・分化、形態や機能等に関わる遺伝子の働きを明らかにし、これらを利用して作物に効率的に新しい形質を付与する技術の開発を進めています。今後の分子育種では研究開発の成果をより具体的に実用化に繋げわかりやすく社会に還元していくことが求められます。分子育種技術の理解に繋がる教育・展示手法の開発、規制や社会動向の理解・把握などにも取り組み、基礎から応用までの幅広いスキルを持った人材の育成に貢献したいと考えています。

生命環境科学研究科 環境科学専攻 准教授 塚本 カナエ (つかもと かなえ)

〈主な研究領域〉  
モノやコトの開発の手法、  
日常生活における「暮らす具」のデザインなど



デザイナーはモノやコトのデザインをする際にコンダクターのような役割だと心掛けてきました。現代はデザインに課された使命は多様化していますが、日常生活を自分の視点で切り取りながらの街づくりのデザイン、食に関するデザイン、日常生活に関するデザイン、社会のシステムのデザインなどを考察していきたいと思っております。

生命環境科学研究科 環境科学専攻 助教 神代 圭輔 (こうじろ けいすけ)

〈主な研究領域〉  
木質科学、生物材料物性学、木質材料学



木材は、計画的な植林によって持続的生産が可能なバイオマス資源由来の材料です。カーボンニュートラルで持続可能な材料である木材に注目し、これまで国立の研究所や民間企業において木質系材料の製造技術に関する研究開発を行ってきました。今後は、木質科学の視点から森林科学への理解を深め、木材の基礎物性と応用技術に関する研究、木質系材料の標準化、木材利用に関する環境貢献の定量化、森林ボランティアの活動形態に関する研究等に取り組むことにより、木材利用の点から資源循環型社会の構築へ貢献していきたいと考えています。